白山ふるさと文学賞

第十四回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

中高校生の部　最優秀賞

「いかりの奥にある気持ち」

北星中学校一年　寺田（てらだ）　梨桜（りお）

夕方になると、私の家のリビングにはピリピリとした空気が流れる。それは、弟が宿題をする時間だ。私の弟は小学三年生。とても元気で、友達とラジコンで遊ぶのが大好きな男の子だ。そんな弟だけれど、勉強はあまり得意ではない。とくに、国語の漢字の宿題になると、いつもつまずいてしまう。

夕方学校から帰ってきた弟は、ランドセルを置くとすぐに宿題にとりかかる。でも、読み方が分からなかったり、書き順をまちがえて消したりしているうちに、だんだんイライラしてくる。そして、

「分かんない」「もうやらない」

と大声で言って、ノートをぐちゃぐちゃにしたり、鉛筆を投げ出してしまうのだ。そうすると、それまで静かに教えていたお母さんの声も、次第に大きくなっていく。

「ちゃんとお母さんの話を聞いて」「わざとまちがえないで」

弟は泣きながら言い返し、お母さんもますますおこって、家の中の空気はピリピリしていく。私は少し離れた場所から、それをだまって見ている。

正直私は、お母さんがおこる姿を見るのが苦手だった。どうしてあんなにおこるのか、どうしてもう少しやさしく言えないのか。そんなふうに思っていた。けれど、ある日、私はふと気づいた。お母さんは、ただおこっているわけではないのだ。弟のことを本気で心配して、ちゃんとできるようになってほしいと願っているからこそ、おこってしまうのだということに。

その日も弟は、

「分かんないから、もうしない」

とさけびながら、漢字の練習ノートを机の上にたたきつけていた。お母さんは最初は、なだめようとやさしく声をかけていたけれど、弟がまったく話を聞かずにふてくされているのを見て、とうとう大きな声でどなってしまった。そのあと、お母さんは無言で夕ごはんの準備をしていた。私はキッチンのほうを見てみると、お母さんが背中を向けたまま、小さくため息をついているのが見えた。そのとき私は思った。

「お母さんだって、きっとおこりたくておこっているわけじゃないんだな」と。

お母さんは、毎日仕事に行って、帰ってきてからも買い物や洗たく、料理などの家事をしてくれている。きっと、すごく疲れていると思う。そんな中でも、弟の宿題に毎日向き合ってくれている。おこってしまうのは、それだけ弟にできるようになってほしい、頑張ってほしいという思いが強いからなんだ。私はそれに今まで気づこうともしなかった。

弟が泣いているとき、私は「またか」と思って、何もしないで見ていただけだった。でも本当は私にもできることもあったのかもしれない。「この漢字、私もいっしょに書く？」と声をかけてみたり、「お母さん、少し休んでて」と言って代わりに弟の話を聞いてあげたり。ほんの少しの気づきで、弟の気持ちも、お母さんの気持ちも、変わることがあるのではないかと思った。

家族の中で何か問題が起こったとき、今まで私はただ見ているだけだった。でも、私にもできることがあったかもしれない。「いっしょにやろうか？」と声をかけたり、弟の話を聞いてあげたりするだけでも、気持ちは変わったかもしれない。

これからは、弟が頑張ろうとしているときに、そばで応援してあげられる姉になりたい。そして、お母さんが疲れているときは、家のことを手伝ったり、やさしい言葉をかけて、少しでも楽にしてあげられたらいいなと思う。家族みんなが笑顔で過ごせるように、小さなことからできることを増やしていきたいと思う。

これまでは、お母さんがおこっているところばかり見てしまって、その気持ちの奥にある家族への愛情に気づけなった。でも、今は、その思いを感じることができて、自分にとっても大きな気づきになっ

た。これからは、もっと家族の気持ちに目を向けて、みんなが安心して笑い合える毎日を作っていきたいと思う。